

追善行の果報

「或る雑誌で見た話」として『実演禪戒法話』（田中鉄道師著）に次のような美談が載っている。

東京の郊外に或る大きな邸宅があつて、奉公人も大勢おり、女中（お手伝いさん）だけでも六人おつた。

その中に新参者のお杉という十八歳の娘がおつた。彼女は口数少なく、まめによく働く女だった。

或る日、一人の女中が、桶の底の抜けてるのを知らずに水を入れたため、台所を水浸しにしてしまった。

その女中は「誰が桶の底を抜かした？」と、大声で怒鳴ったが、みな知らぬ顔をしている。するとお杉が、

「私が粗相いたしました」とあやまり、女中頭から大目玉を頂戴した。



そしてまた或る日、茶の間にあつたコーヒー茶わんを誰かがあやまってこわしたのだらう、叱られるのをおそれて、接着剤でくつつけて盆にふせてあつた。それを知らずに、奥様が客にコーヒーを出そうとして、客の前で恥をかかされる始末となつた。奥様はたいへん立腹して女中頭を呼びつけ、「調べて犯人を連れて来なさい」と厳命した。女中頭が一人一人調べたが、誰もが、知らぬ、存ぜぬ、という。するとお杉が「私がこわしたのです」と詫びた。女中頭がその旨報告すると、奥様はお杉を呼び、直々叱りつけた。

しばらくして、奥様が茶だんすから何かを取り出そうとすると、新聞紙に包んだものがある。何だろう、と開いてみると、大事にしていた南京焼きの菓子鉢が割れて出て来た。奥様は女中全員を集め、誰が割つたのか、と詰問したが、誰も知らないという。するとまたお杉が「私でございます」と白状した。

たび重なるお杉の粗相に愛相をつかした奥様は、お杉に暇をやろうといひ出したが、女中頭のとりなしで

何とか穩便にすまされた。が、それ以後は、お杉にはこわれるような物には手を触れさせるな、と堅く言い渡された。

その後しばらく何事もなく経過し、お盆の季節となつた。十三日、この日は朝から仏間が莊嚴(飾りつけ)され、家宝の古九谷の花瓶が出され、仏前に花が供えられた。

その家に六歳になる坊やがおつて、家の中に入ってきたとんぼを追いまわしてらうちに、とんぼが仏壇の位牌の上にとまつた。それをつかまえようとして前机に足をかけた途端に家宝の花瓶をひっくり返し、割ってしまった。坊やは誰もいないのをさいわいに、そのまま知らぬ顔で外に出た。

奥様がお供え物を持って仏間に入ってみると、花瓶が割れてひっくり返っている。奥様は忿怒の形相すさまじく、女中一同を仏間に呼び集め、誰がこわしたのか、もし犯人が出ないなら全員に責任をとってもらおう、この花瓶は代々伝わった家宝で、これをこわした

んではご先祖へ申し訳が立たない、ときついお達し。

それを受けて女中頭、一同に向い、「いま奥様の言われた通り、私どもよりほかに仏間に入るものはありません。誰かあやまちをした人があるはず。どうか正直に申し出なさい。そうでないと私どもみんなで責任を負わねばなりません。誰も出ないと、お互いに誰だろうと疑い合い、お盆というのに暗い気持ちでおらねばなりません。どうか身に覚えのある人は出てください」と、涙ながらに訴えたが、誰も出ない。さて困った、と思つてると、お杉がおずおず進み出て、「私です」と言った。

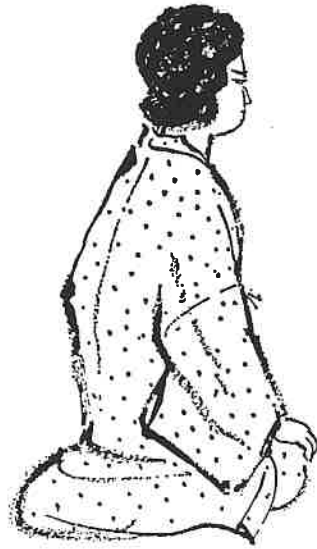
「またお杉か。お前にはもう何も言わぬ。今日限り暇を出すからお家へお帰り！」

お杉はとうとう解雇される羽目に陥つた。

さて、真犯人の坊や、一度は外に出たが、気になつて家に戻つてみると、女中一同仏間で調べられ、お杉が罪を着てくれたので、一時はホツとしたが、悄然として女中部屋に帰るお杉を見て気の毒になり、あとを

私です





つけて女中部屋をのぞき見すると、お杉は荷物をまとめながら、「帰る家もないし、どうしよう」とひとり言をいい、涙を流している。それを見た坊や、たまらなくなつて母親のところへ飛んで行き、「お母さん、ぼくがこわしたんです。勘弁してください。お杉はぼくの罪を着たのです。お杉をゆるしてやってください」と、哀願した。

わが児の言葉におどろいた奥様は、早速再び女中を
仏間に召集したが、当然のこと、お杉は姿を見せな
った。奥様は立ってお杉を迎え、その前に両手をつい
て、「お杉、すまなかった。花瓶をこわしたのは坊やだ
った。お前に暇を出したのは私の重々のあやまり、ど
うか勘忍して、いつまでも家におってください」と、
真心こめてあやまった。

すると一人の女中が進み出て、いつぞや南京焼きの
菓子鉢を割ったのは実は私です、と言い出す。それ
につられて、コーヒー茶わんをこわした者、桶の底を抜
かした者が次々と名乗り出た。奥様はホトホト感心し、
「昔から、奉公人根性というて、自分の粗相を人にな
すりつけようとするものだが、お杉は身に覚えのない
人のあやまちを引き受けて苦しむとは、一体どういう
訳か？」

と、たずねた。するとお杉は涙を浮かべ、
「私は幼少の時両親を失い、兄弟もなく、もとより家
もありません。奉公をして流れ渡って来ましたが、両

お杉



すま
なかつた



親の年忌が来ても供養ひとつできませぬ。それで、どこの家でも奉公人の大勢いるところでは、誰がしたかわからない粗相がありがちです。その時私がそれを引受ければ、粗相した人は喜んで安心される。その喜びと安心が亡き両親の追善ともなろうと思つて、罪を負わしてもらうたのであります。ご当家に参りましたもその通りであります。ことに今日はお盆というのに、こういう事が起こり、互いに疑い合う、これはまことに罪なことであると思ひまして私が引受けて皆さんを安心させたら、それがお盆の供養にもなろうと思ひまして……」と、口ごもりながら述べた。

その家の主人、先刻来、次の間から立ち聞きしていたが、お杉の言葉が終ると、つかつかと入つて来ていふには、

「お杉、お前の話はみな聞いた。聞いて感激した。いまの世に珍しい心がけた。人の苦しみを身に引受けるは実に仏さまにもひとしいおこないだ。いま聞けば、お前には親も兄弟もないということだが、今日から私

ども夫婦が親になろう。お前を家の養女にする」と。天涯孤独のお杉が、一躍大家の養女になることかてきたのは、追善供養のまごころが招いた果報というべきであらう。

「続・二つの月」(佐藤俊明著・井上球二絵)より

